

2021 年度・研究ユニット報告書

「環境と社会に関する地理学的実践」

安食和宏（代表）、中川正、森正人、北川眞也、谷口智雅、朴恵淑

本研究プロジェクトでは、環境と社会に関する地理学的分析と実践に関する基礎的・応用的研究を進めてきた。また、地理学的な知見を基にした大学教育の方法論についての考察を行った。その概要は以下の通りである。

1. 環境に関する研究として、森は、2021 年 11 月開催の人文地理学会において、「オメラスを立ち去る人たちと、地存在論と、一文化地理学において「地」を考えることの意味とは何か」と題した発表を行った。これは、人間と自然環境との存在論的關係性を、後期自由主義の権力への批判的視点を通して考察したものである。谷口は、御嶽山周辺部での水文学的調査研究を進め、2022 年 2 月には、「第 5 回御嶽山火山研究施設懇談会」に出席し、御嶽山周辺地域における自然環境と地域振興に関して、名古屋大学・気象庁・国交省多治見砂防国道事務所・木曽町・王滝村と意見交換を行った。朴は、ローカルな活動としては、三重大学・中部電力（株）協働事業「エネルギー環境教育」を推進した。そして、朴恵淑・矢野竹男編（2021 年 11 月）：『持続可能な三重創生と SDGs 経営』（風媒社）を発表した。さらにグローバルな活動として、2021 年 10 月～11 月にグラスゴーで開催された「気候変動枠組条約第 26 回締約国会議（COP26）」に参加し、かつ三重大学の取組等をアピールするサイドイベントを開催した。

2. 社会との関わりをテーマとした研究活動としては、北川は、2021 年 10 月に出版された田中ひかる編『アナキズムを読む—＜自由＞を生きるためのガイドブッカー』（皓星社）において、以下の 2 篇の書評を執筆した。(1)「M・クナッパ／A・フラッハ／E・アイボア『女たちの中東 ロジャヴァの革命—民主的自治とジェンダーの平等 家父長制の解体なくして、国家なき社会はない』」p.124-125、(2)「ゼロカルカーレ『コバニ・コーリング—世界に無数のロジャヴァを』」p.126-127。そして安食は、自らの地域貢献活動の実践を通して（「三重県紀宝町まち・ひと・しごと創生会議」の会長）、地理学的な視点と知見をいかに現実社会に応用できるかを考察した。

3. 大学教育における実践として、2021 年 11 月に、「人文地理学学生による地理・環境研究中間報告会」を開催した。当日は、アジア・オセアニア、ヨーロッパ・地中海、アメリカ研究の学生たち 6 名がオンラインで（Zoom 利用による）公開研究発表を行い、安食、中川、森、北川、谷口が地域を越えて合同の指導を実践した。こうした実践を通して、地理学の専門的な教育効果を高める方法論について考察を深めた。

以上

人文学部研究ユニット活動報告

2022 年 3 月

研究ユニット名	ワーク・ライフ・バランスと健康経営の関係についての 実証的検討
研究ユニット代表者	岩田一哲（三重大学人文学部・教授）
共同研究者 （ユニットメンバー）	杉浦裕晃（愛知大学経済学部・教授）
研究期間（2019 年度分）	2021 年 4 月 ～ 2022 年 3 月
研究プロジェクトの概要及び 活動計画 今年度の活動報告	本ユニットは、ワーク・ライフ・バランスに関心のある杉浦教授と、企業従業員のストレスと健康経営に関心のある代表者岩田の2名で、ワーク・ライフ・バランスと健康経営の関係を検討し、研究成果を学術論文として投稿し、研究成果の公開を促進することを目的として活動を行った。 本年度についても、コロナウィルスの影響のため、Zoomによる会議を2か月に1回程度の頻度で行い、研究内容についての議論並びに検討を行った。 今回の検討により、アンケート調査結果の検討並びに、ワーク・ライフ・バランスと健康経営に関する検討を進めることができた。特に健康経営については、1本の研究論文（「バランス・スコアカードによる健康経営の評価に関する検討ー人的資源管理の視点からー」）を公表することができた。現在もアンケート調査の分析とさらなる論文執筆に向けて、研究内容の検討を進めている。

研究ユニット名称：斎宮文化研究ユニット
研究ユニットのメンバーの氏名：亀田夕佳、内藤英子
今年度の活動報告： 「斎宮文化研究ユニット」は、伊勢斎宮で行われた文化的行事である『斎宮良子内親王貝合日記』を取り上げ、この行事がいかに伊勢海山の豊かな恵みに基づくものであるかを明らかにするのが目的である。 今年度は、その基本的な作業として、『斎宮良子内親王貝合日記』の本文を校訂し、諸問題を整理した。併せて、その整理の過程で気づいた表現の特性について、亀田が論文として発表した。なお、研究会はおおむね隔月に Zoom で行った。 5 月：研究方針の打ち合わせ。現状の活字本は、堀部正二『纂輯類聚歌合とその研究』（大学同、一九六七年 初版は一九四五年）、萩谷朴『歌合集』、日本古典文学大系、（岩波書店、一九六五年）、萩谷朴『平安朝歌合大成 増補新訂』、第二巻、（同朋社出版、一九九五年）の三種類存するが、それぞれに差異が認められるため、原本である陽明文庫の『類聚歌合』（『平安歌合集上』、陽明叢書国書編第四輯、思文閣出版、一九五〇年）をもとに翻刻作業から始めることとした。以下の内容で進めた。 7 月：日記部分前半の校訂本文作成（翻刻担当は亀田、校訂担当は内藤） 9 月：日記部分後半の校訂本文作成（翻刻担当は内藤、校訂担当は亀田） 11 月：和歌部分前半（1～20）の校訂本文作成（翻刻担当は亀田、校訂担当は内藤） 3 月：和歌部分後半（21～40）の校訂本文作成（翻刻担当は内藤、校訂担当は亀田） 校訂作業を行った過程で、当該行事には「予祝」の意味合いが強く、「貝」の詠みぶりの特異性が認められることがわかった。それらの成果については、亀田が「寿ぎのドールハウス——『斎宮良子内親王貝合日記』の表現——」（『国分論叢』、2021 年 12 月）に論考とした。 以上の手順を経て、今年度は『斎宮良子内親王貝合日記』の校訂本文を確定し、一論文を発表した。思った以上に遅々とした作業になってしまったが、来年度は引き続き注釈作業を行う予定である。

1. ユニット概要

「研究概要」

国内需要が頭打ちとなりコモディティ化に苦しむ一方、製造コストの更なる低減が困難な日本企業では、確固としたブランドの下で製品属性以外の面からも評価を高め、グローバルに事業を展開することが望まれます。また、社会的環境意識の高まりにより、環境問題への取り組みも今日的経営課題となっています。これらの経営課題への取り組みについては、欧米のラグジュアリー企業に一日の長があるとみられます。斯かる視点の下、当ユニットは学外の研究者と協力しながらラグジュアリー企業のブランド戦略について研究しています。

「ユニットメンバー」

代表) 三重大学人文学部法律経済学科 教授 熊谷健

早稲田大学大学院経営管理研究科 教授 長沢伸也

早稲田大学ビジネス・ファイナンス研究センター 招聘研究員 杉本香七

2. 2021 年度活動報告

当ユニットにおける議論を踏まえ、ユニットメンバー（下線）より以下の研究成果が発表されました。

「書籍」

- 長沢伸也・杉本香七 (2021) カルティエー最強のブランド創造経営―，東洋経済新報社
- 長沢伸也・古川貴雄・熊谷健・杉本香七・入澤裕介・井村直恵・中越出・橋田規子・外川哲・山下利之・小山太郎・由井真波 (2021) 暮らしにおける感性商品―感性価値を高めるこれからの商品開発と戦略―，晃洋書房

「学術論文・学会発表」

- Kumagai, K. and Nagasawa, S. (2021) Hedonic shopping experience, subjective well-being and brand luxury: a comparative discussion of physical stores and e-retailers. *Asia Pacific Journal of Marketing and Logistics*, <https://doi.org/10.1108/APJML-04-2021-0256>. (Web of Science 収録)
- Kumagai, K. (2021) Consumer brand evaluation according to brand sustainability self-congruity. *Proceedings of Global Fashion Management Conference 2021*, Global Alliance of Marketing & Management Associations. (Youngone Best Conference Paper Award 受賞研究)
- Kumagai, K. and Nagasawa, S. (2021) Moderating effect of brand commitment on apparel brand prestige in upward comparisons. *Journal of Global Fashion Marketing*, Vol. 12, No. 3, pp. 195-213. (Web of Science 収録)
- 熊谷健 (2022) ブランド、環境施策、および自己概念の調和によるブランド評価形成インパクト：消費者心理に基づくインパクト変化の検討，商品開発・管理学会第 37 回全国大会
- 熊谷健 (2022) 購買意図形成におけるブランド関連環境施策の影響：自己概念調和理論の視座から，日本商業学会中部部会
- 熊谷健 (2021) 消費者のブランド評価に対する企業の環境施策と自己概念調和の影響，日本消費者行動研究学会第 63 回消費者行動研究コンファレンス，神戸.
- 熊谷健 (2021) ブランドイメージ、環境施策と自己概念の調和：Brand Sustainability Self-Congruity の提案，商品開発・管理学会第 36 回全国大会
- 熊谷健 (2021) ブランドトラスト、クオリティリスク、およびブランド評価に対する環境対応製品とラグジュアリー性の影響．日本感性工学会感性商品研究部会第 71 回研究会

以上

研究ユニット 2021 年度活動報告

2022.03.25 青木雅生

○研究ユニット名称

サステナブル組織研究会

○メンバー

青木雅生 (人文学部・教授) <研究ユニット代表者>

米山哲司 (特定非営利活動法人 M ブリッジ・代表理事)

○今年度の活動報告

本研究ユニットにおいて、サステナブルな社会を実現するための組織のあり方や取り組むべきことについて検討をすることを目的としている。営利組織である企業はもちろん非営利組織も行政組織も社会的責任を果たすことが求められるようになってきている中、SDGs (持続可能な開発目標) が国連において採択され、いよいよあらゆる組織が地球環境・社会全体の持続可能性の確保のために、積極的に関与すべき段階にきた。世界だけではなく、日本および各地域においてもその実現を目指すのであれば、営利非営利を問わず検討すべき事柄となったことが、本研究ユニットにおける研究の背景である。

企業などの営利組織、および NPO 法人などの非営利組織のいずれについても、サステナブルな組織のマネジメントについての検討を青木が、SDGs についての社会的認知を広げることについての検討を「SDGs de 地方創生」および「SDGs アウトサイドイン」公認ファシリテーターである米山が担当し、研究を進める。三重という地域において SDGs を進めていく主体となる組織や個人のあり方についてツールを使って理解度を深めていく方法論などを取り込むことによって、社会実装の可能性を高めることを目指している。

今年度は 2 つの取り組みを行った。

(1) オープンデータカード`SDGs スクエア`〈三重県版〉

本研究ユニットのメンバー 2 人が取り組んできた「産官学民」連携 (企業・行政・大学・NPO など市民活動の垣根を越えた連携) の成果として、「オープンデータカード`SDGs スクエア`〈三重県版〉」を作成し、そのテストプレイを 2021 年 12 月 15 日 (水) に本学人文学部法律経済学科の学生 (2 年生) 17 名の参加を得て行った。コカ・コーラ ボトラーズジャパン株式会社、三重県、三重大学 (人文学部青木研究室) および NPO 法人 M ブリッジの「産官学民」4 者連携による共同事業「ミエミライ」の活動の一環でもある。

「ミエミライ」という事業は、三重の幸せな未来を思い描きながら対話を通じて魅力向上や課題解決のアイデアを考えるワークショップとして、2018 年度および 2019 年度に開催した。このような場に多様な立場の方たちが集まって、より対話が行いやすいようにするために 2020 年度よりカードゲーム形式を取り入れたツール開発を 4 者が連携して行ってきた。

「オープンデータカード`SDGs スクエア`〈三重県版〉」として完成したので、正式リリースを行う前に、三重大大学の学生の協力を得て、テストプレイを行った。

この「オープンデータカード`SDGs スクエア`〈三重県版〉」は、三重県のオープンデータをもとに、県内の地域課題の現状について SDGs と関わらせながら、クイズを通して気軽に学べるカードツールとなっている。大学や地域におけるワークショップ等の現場で活用いただくことで、地域課題を自分ごととして考えるきっかけを提供し、主体的に地域に関われる人を育むことを目的としている。

当日は、この研究ユニットのメンバーである米山がファシリテーターとなり、SDGs の考え方が三重県というローカルな課題と結びついていることについて学んだ後に、4 つのグループに分かれて実際にカードツールを用いて、三重県の課題と現状について知るとともに、意見交換しながら認識を深めていった。

今回のテストプレイの成果を踏まえて、今後はこのカードツールを活用したワークショップを三重県内で展開していくとともに、ファシリテーター養成講座を通じてカードツールがより多くの場で活用されることを目指していく予定となっている。

なお、このテストプレイの様子は、三重大大学のホームページ「トピックス」でも公開されているので、参照していただきたい。

<https://www.mie-u.ac.jp/topics/kohoblog/2021/12/sdgs-2.html>

(2) SDGs ワークショップ

前年度にカードゲーム「SDGs de 地方創生」を用いたワークショップを開催できた成果を踏まえ、今年度も三重大大学北勢サテライトにおいて開催している「北勢地域経営研究会」において、SDGs ワークショップを企画した。同研究会はこの研究ユニットの代表でもある青木が代表となっている。同研究会は、三重県内の中小企業が顧客にも従業員にも「魅力ある企業」となるため、異業者交流も兼ねた若手中小企業経営者を中心とした学習機会の創出を目的としており、昨年度から定例で月 1 回程度開催している。この研究会の一環として、SDGs ワークショップを開催した。

SDGs で掲げられてる社会的課題の解決に向けて全世界的に取り組まれている中、SDGs とビジネスの関係について、まだつながりが感じられない方が少なくないのが現状である。しかし、SDGs を考慮に入れた経営は現代にとって不可欠である。そのような中、世界が直面する環境問題や社会課題をビジネスの力で解決することにチャレンジし、新たなイノベーションで持続可能な社会を目指すことを学べるカードゲームである「SDGsアウトサイドイン・カードゲーム」を用いたワークショップを公認ファシリテーターで本研究ユニットメンバーである米山を講師に 2022 年 3 月 19 日に開催した。SDGs とビジネスの関係についての理解、カードゲームを通じた体験、その振り返りという一連のプロセスを通して学ぶ場の創出である。当日は 21 名の参加者があり、終了後の参加者からのアンケートでは以下のような感想を得ることができ、SDGs を単に知識として学ぶだけではなく、実際の経営に生かせるような形での学びの場となった。

- ・ 事業を考えるにあたり、自分のビジョンを持ち、仲間に共有して同じ方向性を持ちながら取り組むことの重要性を感じました。
- ・ ”本気で”SDGsに取り組んでいるか?という点については、SDGsの流れを進めるうえでとても大切なことと感じました。
- ・ 企業として、経営理念、創立ビジョンなどを見つめなおすことが大切と思いました
- ・ SDGsの意義の1つである他業界の方とも交流できた。
- ・ 人も組織も本質的に大事なことを改めて確認できました。
- ・ 社会から選んでもらえる企業にならなくてはと教えてもらった。

これらの成果を踏まえつつ、次年度以降においても、場づくりのための様々な可能性をさらに探っていきたいと考えている。

なお、SDGs ワークショップの様子は、北勢サテライトのホームページにてその様子が公開されているので、参照していただきたい。

<https://www.rscn.mie-u.ac.jp/hokusei/2022/03/inov-page-1730.html>